

生業のない暮らしを始めて

阿部軍治
筑波大学名誉教授

定年後を無計画に暮らし始めて

大学を定年になってもう少しで一年になる。いまは寿命が長いので、定年は人生の終わりではなく、中締めであるとよく言われる。たしかにそうかもしれない。とは言つてもこれから先の持ち時間が既に通り過ぎた分と同じだけあるわけではないので、現実的にはかなり終わりに近いと認識せざるを得ない。だから自分は定年後の余生を成行きにまかせて無計画に暮らし始めた。

それでも不確かながら定年後にやりたいことはいくつもある。大学在職中に手がけながら、時間が足りなくて成し遂げられなかつたもので、それらの研究と執筆を続けて完成させるということである。大学生活最後の七年ほどは実に多忙で、自分の能力不足とやり方のまずさもあって、とにかくいくつかのテーマについて手をつけ執筆を始めながら、中途半端に終わっているのである。やはりそれらは仕上げたい。そうで

ないとえらく悔いを残すことになる。ただ問題はそれらをやるためにには相当の時間と費用がかかることがある。いまは時間はあるが、費用面でいろいろと制約があり、その許される範囲内でやるということになる。それに何もやらないでは家の中の粗大ごみになってしまう。そういうわけで費用がかかり経済的メリットがないことが分かっていてもやってみるほかないのだ。

シベリア抑留者を偲んで

差し当たりやり遂げねばならないテーマが三つほどある。その一つはシベリア強制抑留問題に関してである。太平洋戦争終戦直後に満州に滞在していた関東軍など大量の日本人六十～八十万人がソ連軍に拉致、ソ連領内に連行され、夥しい犠牲者を出した。このテーマに関しては九死に一生を得て生還した抑留者たちの手によって多数の手記が書かれており、それらを調査し、二

つ目の論を纏めているところなのだ。彼らは酷寒のシベリアで乏しい給養で飢餓と重労働に苦しめられ、何万もの人が家族のことを思いながら寂しく死んでいった。シベリアでの艱難辛苦を綴った彼らの手記を読んでいると、悲運なこれら人々の慟哭が聞こえるようで、胸がふさがり、ときには涙を禁じえない。

三年ほど前にそのシベリアの抑留地を訪れ、お墓参りをした。その時も改めて抑留者たちの労苦が偲ばれ胸が痛んだのだった。だから、書いた物を出したいと思うのだが、飽食暖衣にどっぷりつかっているいまの日本ではとても売れるような物ではなく、この種の本はほとんど自費出版なので、どうやって読者に届くようにするかが一番問題で、悩みの種なのである。

トルストイアンに引かれて

もう一つは日本におけるトルストイアン研究についてである。明治末から大正期にかけて日本ではトルストイがもてはやされ、皆がよく読み、多くの論文が書かれ、文学や思想等に極めて大きな影響があった。大正三年、島村抱月の脚本と松井須磨子主演によるトルストイ原作の芝居『復活』が、その中で須磨子が歌う「カチューシャの唄」のお陰もあって、たいへんな人気を得て、日本におけるトルストイ熱は最高頂に達し

た。トルストイ・ブームが起き、デパートのお歳暮商品リストにトルストイの本が入れられるような流行ぶりになったのである。

猫も杓子もトルストイといったような流行ぶりで、日本の津々浦々までその名声は広まり、そして大勢のトルストイアンが出現した。文学の方では徳富蘆花、武者小路実篤などがその代表的な人たちであろう。蘆花はトルストイを訪問後東京郊外でその強い感化を受けて農業を始めた。徳富蘆花という作家はいまはあまり読まれなくなつたが、その頃は日本を代表する作家で、どの作家よりもよく読まれ、人々への文学や思想、そして人生の面におけるその影響は非常に大きなものがあった。当時の多くの人が蘆花から文学的な影響ばかりでなく、物の見方や生き方そのものを学んだと語っているのだ。

青年時代の武者小路実篤のトルストイ心酔ぶりも桁外れで、その感化を受けて大学を中退し作家の道に入っている。彼はトルストイ流の人道主義をわが国に広めるのに大きな役割を演じたし、他方では、仲間を誘って老翁の感化濃厚な理想郷「新しき村」を興したり、その影響は非常に大きなものがあったのである。

思想面におけるトルストイの影響について言えば、青森県出身のユニークな百姓思想家江渡狄嶺もこのロシアの文豪にかぶれ

てせっかく入った東京大学を中退して、千歳村で畠を借りて百姓を始め、他方では文筆活動もして多くの人に影響を与えた。京都に奉仕活動・便所掃除で知られている一燈園ということがある。その創始者を西田天香というが、彼がそのような運動を起こすきっかけになったのもトルストイであった。初期の彼もその老翁に熱中し、その教えを実践しようとしたのだ。人の家の便所を無料で掃除するというありがたい活動で有名になった。

もう存在していないと思っていたら、なんとその一燈園が京都の山科に存在し、最初の頃とは大分変わったようだが、それでも活動を続けている。一年近く前に訪れ、村田さんという責任者のお方からいろいろお話をうかがうことができた。そこはお金と物の獲得に狂騒しているいまの世の中とは別天地で、精神主義に徹した質素な暮らしをしており、大いに感じ入って帰ってきた。物質主義と金権的な現代においては、実に稀有の、貴重な存在ではないかと思っている。そう言えば、最初日向に建設された「新しき村」は閉鎖されたが、それを引き継いた「村」が埼玉県に存在しているようなので、そのうち行ってみたいと思っている。

時代へのささやかな抵抗

こうやってみるとトルストイアンというのは風変わりで浮世離れしているかもしれない。いやおかしいのは物欲金銭欲にとり憑かれた世の中の方ではないのかと思ったりもする。いずれにしろ私はたいへん心が引かれるのである。トルストイアン的な生き方というのは物質主義的な現代においては時代に逆らって生きることを意味し、自分でそれを実践することはとても不可能であると思うが、そういう生き方を研究し、それを金権的物質主義的な現代にぶつけるだけでも意味と存在価値があると勝手に考えてやっている。トルストイや徳富蘆花などという文人は物質主義や商業主義、産業至上主義や公害にまみれた現代社会では貴重な存在ではないかと考えるからである。

これについて昨夏ロシアで開催された国際トルストイ・シンポジウムで研究発表をしようと計画して論文を送っていたのだが、ビザの発給を拒否されてモスクワに行けず、論文は代読してもらった。本当にロシアという国は分かない国である。ブラックリストに載っているというのであるが、どんな理由でそうなったかは不明である。たぶん上述の抑留地訪問のせいではないかと想像している。そのことを最近学会である人に話したら、かつて高名なロシア文学者の木村浩さんがソルジェニーツィンの発禁本

を翻訳したためにビザ発給を拒否された例を引いて、慰められた。この際負け惜しみのようだが、これで自分も“一角の研究者”として認められたのだとひとり合点するのも悪くないかもしれないと思っている。

驚天動地のソ連邦消滅

有為転変は世の常とはいえ、二〇世紀のロシアほど何度も劇的な変化をした国はほかにはあるまい。1905年の第一次ロシア革命、17年のブルジョアと社会主義の二度の革命、1980年代のペレストロイカ、それから91年のソ連邦解体という激変があり、しかもその間に国土を戦場にした世界大戦に二度も見舞われているのだ。まことに恐ろしいほどの変動である。

その中でも目の前で起こったソ連邦消滅は驚天動地の出来事で本当に驚かされた。そのような国を対象とした研究は実にたいへんであるが、興味深くもある。もう紙幅が尽きそうなので省略するが、このソ連消滅に関連したロシア問題が三つ目の研究テーマなのである。この他に、日本トルストイ協会の研究誌編集やロシア語の辞書や参考書の執筆も手がけており、つまりほどほどに（もしかしたら相当？）仕事をやっており、定年になって時間をもてあましているわけではない。

無益の益を生業にして

こうやって挙げてみると、直接的に経済的利益を産み出したり世の中のためになるような仕事はほとんどない。これが私の研究と仕事の泣き所なのである。私の研究がそうであるように、文系研究の一番の弱点はその多くがたぶん直接的には目に見える経済効果をもたらさないという点にある。従来はそれでもまだ何がしかの研究費を得て、そのような研究もできたが、大学が法人化された後ではそのような研究が成り立つのであろうかと気になる。法人化後至上命令として経済効率が全ての分野で求められると、文系の諸学問は切り捨てられかねないということを危惧する。文系の諸学問は経済的には無益に見えても、その他の諸学問や諸産業にもそして社会全体にも空気のような存在として益があり必要ではないかと考えるのであるが……。

（あべ ぐんじ／ロシア文学・比較文学）